シルクロード天山北路の形成と展開
―キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査(2018・2019年)―

山藤　正敏　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所研究員
バキット・アマンバエヴァ　キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所部長

Formation and Development of the Silk Road, Tien Shan North Way: Archaeological Survey of the Western Chuy Valley, the Kyrgyz Republic (2018 and 2019)

YAMAFUJI, Masatoshi　Researcher, Nara National Research Institute for Cultural Properties
AMANBAEVA, Bakit　Head, The Institute of History and Cultural Heritage, National Academy of Sciences, the Kyrgyz Republic

1. はじめに：調査経緯と目的

2018年9月、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所とキルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所は、5年間の期限で考古学調査に関する研究協力協定を締結した。同年、この合意に基づいて、チュー渓谷西部においてチュー渓谷考古学プロジェクト(Chuy Valley Archaeological Project：CVAP)を開始した(山藤・アマンバエヴァ 2020)。

5～6世紀にソグド商人によって成立したシルクロード天山北路が東西に貫くチュー渓谷は、交易都市の成立を解明する目的で、1940年代よりソヴィエト人考古学者により重点的な調査の対象とされてきた(Вернштам 1950; Кожемяко 1959)。近年では、東部のクラスナヤ・レーチカ(Krasnaya Rechka)やアク・ベシム(Ak-Beshim)において考古学調査が実施されている(e.g. 山内・アマンバエヴァ編 2016；城倉他 2016等)。

従来の調査は、拠点都市やそれに付随する城塞等を主な研究対象としたことから、当該地域の包括的な文化史の把捉には必ずしも至っていない。こうした状況はチュー渓谷西部では特に顕著である。そこで本調査は、チュー渓谷西部の東西約35 km、南北約60 kmを調査対象範囲に設定し、包括的な考古学踏査を実施することで天山北路の形成過程とその後の歴史的展開、また、交易都市の周囲の状況を復元することを試みている。

昨年度末に2018・2019年に実施した考古学踏査の成果の概要については既に紙上報告済みのため、本稿では、同調査における成果の一部を取り上げて考察を加える。

2. 調査の概要

本調査はチュー渓谷西部、キルギス共和国の首都ビシュケクから西方約62 kmに位置するカラ・バルタ市の周辺地域(東西約35 km、南北約60 km)を調査対象とした(**図1**)。当該地域の南には天山山脈の前山であるキルギス山脈(Kyrgyz Ala-Too)がそびえるが、北には沖積平原が広がり、国境を越えて北方のカザフスタン共和国に続く。調査地域の東はアク・スウ(Ak-Suu)川及びクレポスト(Krepost)川、西は支流や現代の水路等を繋いだ任意の境界線により画され、調査地域のやや西寄り中央にはカラ・バルタ(Kara-Balta)川～ジョン・アリク(Jon-Arik)川が南から北へ貫流する。本調査では、調査対象地域を4つの区域に分割した(Zones I～IV)。上記区分に従い、昨年度までに2回の現地調査を実施し、既知の14遺跡を含む計52遺跡(CV18001～18021、CV19001～19031)を登録した(山藤・アマンバエヴァ 2020)。

3. 新規に確認した城塞遺跡(CV19029)

2019年調査時に本調査の分類で「中型居住地(Town)」に相当するCV19029を新たに確認した(**図2・3**)。この遺跡は、シス・トベ(CV18001)北方約27 km、トク・タシュ(Tok Tash)川とカラ・スウ(Kara-Suu)川の合流地点南岸の平坦面に位置する。

遺跡は平面不整五角形を呈し、東西約274 m、南北約227 mを測り(面積約4.5 ha)、城壁が外周を廻る。城壁は浸食により崩落して断面台形を呈しており、裾部で厚さ15 m程度、高さは5 m以上残存していると

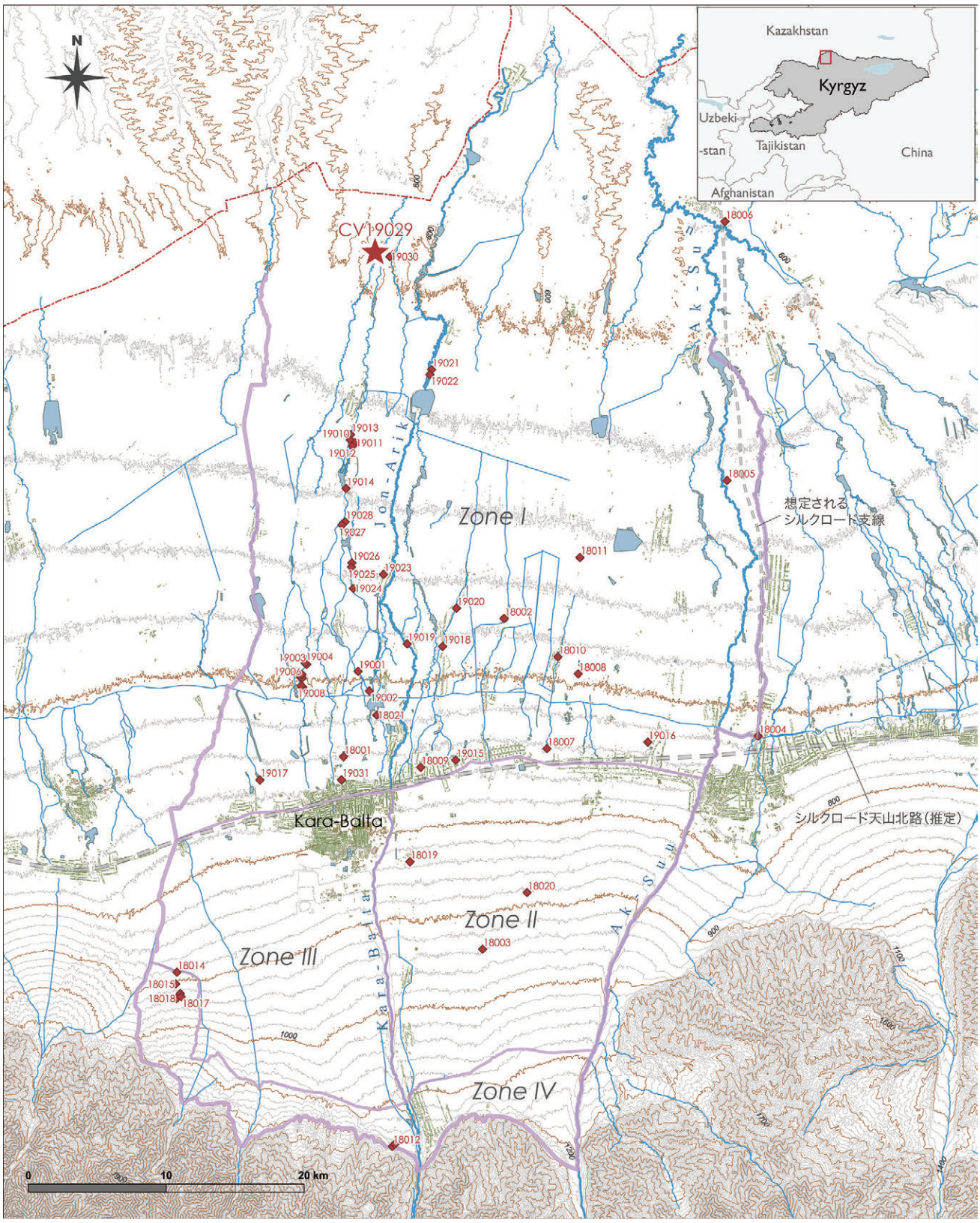

図１　調査対象地域地図（◆は本調査で記録した遺跡）

思われる。城壁上には、「塔」の痕跡と考えられる円形の高まりが少なくとも 21 ヶ所で認められた。南西・南東・東隅・北東隅・北西隅付近の他、北面・西面中央・南面中央では、やや大きめの「塔」が並ぶ。城壁の状態や内外の状況から判断すると、北面・西面中央・南面中央の「塔」状遺構は、元来の出入り口、城門であった可能性が高い。城壁の内側は、西南部にくぼみ、南東部にわずかな高まりが見られる他には地

図2　CV19029とその周辺（UAVによる空撮、北から）

図3　CV19029全景（東から）

形の起伏は見られず、ほぼ平坦面を呈している。遺構の痕跡も特に見られなかった。城壁の外側は、北・西・東面の城壁近くを小河川に囲まれる一方、南側は平坦地であり、現在は耕作地として利用されている。南側の耕作地内には比較的多くの土器片が散布していたことから、城壁外南側では何らかの活動が行われていた可能性がある。

南城壁外の耕作地で採集した土器には、内傾口縁を有するカップや口縁端部がわずかに立ち上がる粗製無頸壺が混じっており、概ね9世紀後半から10世紀後半の年代を示すと考えられる。おそらくは城壁内も同じ年代と思われるが、今のところ確証はない。

なお、CV19029を典型的なシルクロードの都市遺跡と比較すると、構造がより単純であることがわかる。一般的に、シルクロード沿いの都市遺跡は、城壁を有する中心部（シャフリスタン）、城壁隅部に位置する宮城（ツィタデル）、シャフリスタン外の街区（ラバト）から成るが、CV19029においては現況ではシャフリスタンのみしか見当たらない。東のカラ・スウ川を渡った東隣には先行する時代の大規模墓地（CV19030）がそのまま残されており、これを取り囲むようにして街区が形成されたと考えるのは無理がある。現況では、南城壁外南方に小規模な街区が存在した可能性を指摘するにとどめたい。

図4　小型遺構CV19021（東から）

6〜11世紀のチュー渓谷には、4つの中核都市を含む大小20余の都市が存在したことが知られている。これらの多くは、チュー渓谷を東西に貫く天山北路沿いに一定間隔で所在したが、9世紀に開通したと考えられる支線上にもいくつかの都市が築かれた。CV19029はこれらのシルクロードの路線上から全く外れた場所に位置しており、その目的や機能の解明は今後の課題である。

4. 小型遺構の機能について

これまでの調査により、計20遺跡で小型遺構を記録した。平面形は矩形か長円形が多く、土塁・周溝により区画されている。これら1基当たりの規模（内寸）が100 m^2を超えることは稀であり、単体で残される頻度が比較的高い。昨年度の報告集において、土塁と周溝の配置により、これらを2つのタイプに分類し（A：溝が内周に掘られ、土塁が外周を廻るもの；B：土塁が内周を廻り、溝が外周を廻るもの）、これら2種類の遺構が重複する限られた事例（CV19021）（**図4**）から、A型がB型よりも時期的に先行すると推測した（山藤・アマンバエヴァ2020）。

依然として課題になっているのは、小型遺構の機能である。これら一連の遺構に対して、当初は家畜囲いや小屋跡等の日常生業関連の機能を想定したが、一部の遺構は家畜の群れを管理するには規模があまりに小さく、また、生業関連の建物跡にしては採集遺物があまりにも少ないことから、こうした機能から切り離し

図５　矩形小型遺構 CV19003（UAV による空撮、上が北）

た名称で一括せざるを得なかった。その後、林俊雄氏からご教示いただき、小型遺構の中に、南シベリアからモンゴルにかけて確認されている突厥の追悼遺構に類似した造りのものがあることを知った（林 2005）。突厥の追悼遺構は土塁と周溝から成り、平面長方形あるいは方形を呈する。出入口は東側に設けられることが多いようであり、土塁の外から出入口側に対して直角に石列が並ぶ。規模は大小様々であるが、可汗クラスのキョル・テギン廟は、周溝の内側が東西 67.25 m、南北 28.25 m の版築の土壁に囲われ、ここから東方に延びる石列は約 3 km にも及ぶ。土塁・周溝の内側には、石囲いや石槨、石人が認められ、掘立柱建物が検出された事例もある。

これとの比較で小型遺構を見直すと、追悼遺構と考えてもよい事例をいくつか確認することができた。2019 年調査では、記録した 17 遺跡において計 30 基の小型遺構を確認した。このうち 20 基が平面長方形・方形を呈している（**図５**）。規模は内寸で 70 m^2 以下のものと 80 m^2 以上のものとに概ね分かれ、計測できた 19 基の最小値は 14 m^2（CV19011-1）、最大値は 154 m^2（CV19012-2）、中央値は 59 m^2（CV19028-3）である。全て土塁と周溝を伴っており、A・B 型いずれも含む。ただし、A 型の方が B 型よりも若干大型の傾向がある。出入口と思われる土塁・周溝が途切れる箇所は内寸で 50 m^2 以上の遺構で見られ、ほとんどの場合、北・北東・東・南東・南・南西のいずれかに開口部分があるが、CV19031 では四隅（北東・南東・南西・北西）が開く。また、2019 年に確認した遺構のほとんどは小河川の東岸に造られていた。ソヴィエト時代の大規模な開墾を考慮してもなお、分布に偏りがある。小型遺構内外には遺構や石列は見られなかったが、元来は東方に向かって石列が並んでいたのかもしれない。

最終的な結論は発掘調査によってのみ導かれるとして、現状では、上記の矩形小型遺構 20 基は、古テュルク時代の追悼遺構の一種ではないかと思われる。平面長円形の小型遺構については、今後も検討を続けたい。

5. おわりに

昨今の情勢のため 2020 年度は現地調査を実施できなかったが、昨年度の調査時に明らかになった城塞遺跡 CV19029 と矩形小型遺構に焦点を絞って調査成果の一部を紹介した。チュー渓谷はこれまで、シルクロード天山北路沿いのソグド系交易都市の存在により良く知られてきたが、本調査によって未知の活動痕跡をまだまだ内包していることがわかってきた。今後も精細な分布調査を通じて、シルクロード天山北路を取り巻く文化的・歴史的動態に迫っていきたい。

■参考文献

・Бернштам, А. Н. 1950 *Труды Семиреченской Археологической Экспедиции Чуйская Долина*. Материалы и Исследования по Археологии СССР №.14. Москва и Ленинград, Издателъство Академии Наук СССР.
・Кожемяко, П. Н. 1959 *Раннсредневековые Города и Поселения Чуйской Долины*. Фрунзе, Академия Наук Киргизской ССР.
・城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・山内和也・B. アマンバエヴァ　2016「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015 年秋期）調査」『Waseda Rilas Journal』4 号　43-71 頁。
・林　俊雄　2005『ユーラシアの石人』雄山閣。
・山内和也・アマンバエヴァ，B.（編）2016『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡―2011～2014 年度―』独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。
・山藤正敏・アマンバエヴァ，B.　2020「シルクロード天山北路の形成過程―キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査（2018・2019 年）―」『第 27 回西アジア発掘調査報告会報告集』67-70 頁　日本西アジア考古学会。